〔松屋筆記九十八〕車笠

按、車笠といふは、車ノ輪の形に似たるゆゑの名にや、

〔我衣〕ハチク竹ガサ、バイジリト云、地ニテ作ル、下リハナシ、元文ヨリハヤル、元ト釣人ノ笠ナリ、釣竿ノフチヘサハラヌヨウニシタリ、

〔嬉遊笑覽十二漁獵〕後世ばい尻といふ笠あり、今は用ゐざれども、もと釣の爲に作りたる笠なり、釣竿の笠の縁に障らぬやう壺めて作れり、〔略〕中竹の皮笠なり、

〔藻鹽草十七〕笠　つぼ笠、つぼね、つぼね笠きたる女房馬にのりくちをひかして西へこそゆけ

〔七十一番歌合中〕四十四番　右　笠縫

見えじとやうちかたぶくるつぼね笠すげなげなるはうらめしき哉

〔古今要覽稿器財〕つぼみ笠

つぼみ笠は、つぼ笠と同じく、女の所用にして、文字には壺笠と書くにや、新撰六帖の衣笠内府の歌に、ふりやまぬ雪間の梅のつぼみ笠、とよまれたるにても、其形大方は知られたり、何れにも其笠のつぼやかなるより、名付しもの成べし、また藻鹽草に、つぼね笠と有も、おなじものなるべし、

〔夫木和歌抄三十笠〕つぼみがさ　衣笠内大臣

ふりやまぬゆきまのむめのつぼみがさおもふ心のいつかひらけん

○按ズルニ、つぼみ笠、つぼね笠、共ニ市女笠ノ類ニシテ、其形狀ニヨリテ稱セシモノナラン、

〔陰德太平記六十九〕肥前國有馬合戰幷島津龍造寺合戰附隆信最後之事

或書曰、〔略〕中〔田尻〕鑑種兜鍪ヲバ不著、其比西國ニ流行花笠ヲ冠ラレシニ、笠ノ上ヨリ矢二筋被射テ死ニケリ、